

フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察（Ⅶ）

—「診療録」と「公刊された論文」との対比—

鑑 幹八郎・佐藤 淳一

まえおき

私たちはこれまで、フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察を2003年から続けてきた（I-VI、参考文献参照のこと）。本論文も同じく、診療録¹⁾と公刊された論文²⁾との対比を行い、フロイトが論文を構成していく道筋を明確にしていくことを目的にしている。

この対比の作業は公刊論文と診療録との比較検討を行うものであるが、それには二重の意味がある。まず、公刊論文と診療録との内容を比較検討すること、そしてさらに、公刊論文にされたときに加えられた様々な変更—追加、削除、変更、ほのめかし、推測—がなされた理由や背景を明らかにすることである。これらがなぜなされたかはフロイトの意図を推測するという想像力を必要とする仕事になる。フロイトの「ねずみ男」論文については、初めて開催される精神分析の国際学会で発表されたものであった。フロイトが精神分析の中核的な技法や心的機制をどのようなものと考えてか示そうとしたものであったといえることができる。その点で、我々研究者の立場としては、診療録に見られる事実に近い記述と発表され、公開された論文との違いに注目しやすいという利点に立つことができる。本論文の目的と意図は一貫して、これまでのもものと同じである。

2. 「診療録」と「公刊された論文」の対応表

分析の方法はこれまでと同じ手法を用いている。すなわち、診療録のセッションごとに、「診療録」の内容、それと対応する「公刊された論文」の内容、両者の内容の比較、内容の主たるテーマを対応表（1～8）に示した。

「診療録」と「公刊された論文」の比較作業は次のように行った。セッションの内容が公刊された論文にほぼ同様に扱われているものを「同様」、セッションの内容が公刊された論文にほぼ扱われていない場合を「省略」、セッションの内容が公刊された論文に扱われているものの、明らかにセッションとは異なる内容に変更されている場合を「変更」、セッションの内容が公刊された論文に扱われているものの、明らかにセッションでみられない内容が追加されている場合を「追加」、セッションの内容が公刊された論文に明確に扱われていないものの一部示唆されている場合を「示唆」とした。なおセッションの内容の後には、それぞれ対応する邦訳の該当ページを（著・ページ数）として示している。

今回の論文で扱ったセッションは第40セッションから第47セッションまでである。残存しているねずみ男の診療録はこの第47セッションでいったん終了する。つまり、治療の最初の4カ月分の記録が破棄されずに保存されていたことになる。実際の治療期間は、「約

1カ年にわたるその治療」(Freud, 1909, 213)、 236)と述べられており、この後約7ヶ月以上「11か月以上にわたる分析治療」(Freud, 1909, 続いたとされている。

表1 第40セッション (1907年12月28日)

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
飢えしとき、食を与うればすなわち活く。(記 .119)	-	省略	空腹の患者へのフロイトの食事の提供
続き。ウンターラッハでの強迫のこと。彼は突然「痩せなくてはならない」という思いにかられた。食事の途中で席を立ち、もちろんデザートのお菓子やケーキなどは口にせず、汗だくになるまで太陽の下を走るようになった。そうして休んではまたいくらか走った。走って山を登ったこともあった。断崖絶壁に立つと、飛び降りてしまおうとも思った。当然のことだが、そんなことをしたら死んでしまっただろう。(記 .119)	ある日、避暑地で彼は突然、「自分は肥りすぎている、やせなければならない」と思いついた。そこでプディングの出る前に食卓を立ち、無帽で八月の灼けつく陽光の路上を走り、汗をたらたら流しながらついに立ち止まらざるをえなくなるまで山へ馳せ降り始めた。ある急峻な山腹で「そこを跳び降りろ」という命令が突然聞こえたときには、この痩せたい要求の背後から自殺の意図がその変装を脱いで顕わになったのである。そこをたび降りればきっと彼は死んでしまったにちがいない。(著 .237-8)	同様追加 ([「そこを跳び降りろ」という命令)変更 (ウンターラッハ→避暑地)	痩せ強迫、炎天下のランニング、自殺念慮
これに関連する軍隊時代の記憶。志願兵として勤務していた当時の彼にとって山登りは苦手だった。エクセルベルクでの冬季演習のとき、彼は遅れをとったので、山頂で従妹が待っていてくれると想像して、自分を叱咤激励した。だが、そんなことをしても効果はなかった。彼は遅れに遅れ、ついには落伍者の仲間入りをするはめになった。(記 .119)	-	省略	軍隊時代の落伍ぶり
彼の言うには、軍隊時代一父親が死んだ年一に生じた最初の強迫は、当時はまったく仮定法的な性格のもので、たとえば「もしいまお前が何か命令違反を犯そうとするなら・・・」というものだった。彼は、父親に対する自分の愛情を測定するため、とでもいうかのよう、いくつかの場面を思い描いてみた。もし自分が隊列を組んで行進している最中に、目の前で父親が倒れたら、自分は隊列を離れて父親のもとに駆け寄り、父親を助けるだろうか？(当たりくじの金をポケットに入れて隊列を追いかけた父親の記憶)。この空想の由来は、兵舎を出て行軍中に自分の家の前を通り過ぎたときである。そのころ彼は3週間の外出禁止をくらっていて、父親が死んだあとの最初の辛い1、2週間のあいだ家族に会うことができなかったのである。軍隊生活は彼にとって居心地のよいものではなかった。彼は無感動になっていたし、何をやってもうまくいかなかった。(記 .119-20)	-	省略	軍隊時代の仮定法的な強迫、父親への愛情をはかる空想
彼の上官に、部下を犬のように扱う中尉がいた。部下が確かな踏み込みができないと、サーベルの平で部下をたたいた。こんな記憶がある。あるとき彼は意を決して、「中尉殿、サーベルでたたかれなくてもちゃんとやってゆけます」と言った。相手の男はひるんだが、すぐに近づいてきて、「今度は鞭をもってきてやる」と言った。そのときは煮えくり返る思いをこらえねばならなかった。彼は何度も決闘を申し込んでやろうと想ったが、結局あきらめた。(記 .120)	-	省略	軍隊時代の乱暴な上官に対する反発とあきらめ
父親がもう生きていないことは、ある意味では彼にとって歓迎すべきことだった。生きていたら、父親は老兵としてとても悲しんだだろう。父親は彼のためにコネをつくってやってもいた。彼が父親に将校のリストを見せたとき、父親はそこに見覚えのある名前、すなわち自分が仕えたある将校の息子の名前を発見した。そしてその将校に一筆したためたのである。(記 .120)	-	省略	軍隊時代の父親によるコネ

<p>その将校については、こんな話がある。ある日のこと、プレスブルクで、大雪のために列車が駅に入れなくなった。そこで彼の父親が、普段は市場に出入りを禁止されているユダヤ人たちにスコップを持たせてあたりを雪かきさせた。当時この一帯の兵站をまかされていたその将校が父親に近づいてきて、「よーし、さすが長年の戦友だ、よくやってくれた」と言った。すると父親は、「このへちま野郎、『長年の戦友』だと？俺がお前を助けてやったからか、今までとはずいぶん態度がちがうんだな」と言い返したのである。(記.120)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>父親の軍隊時代の雪かき、それに関するある将校との言い合い</p>
<p>(走り回ることによって父親を喜ばせようと努力したことがうかがえる。)(記.120)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>フロイトの分析</p>
<p>ウンターラッハでの別の強迫。これには従妹に無視された一件が影響している。(記.120)</p>	<p>恋人がその避暑地に滞在中、彼はあの瘦せたい欲求のほかに、一連の強迫的な活動を次々と生み出したのであった。これらの強迫活動は、少なくともある点では彼女自身と直接関係を有しているものである。(著.238)</p>	<p>示唆</p>	<p>恋人との関係が影響した一連の強迫</p>
<p>おしゃべり強迫。ふだん彼は母親とあまり口を利かなかったのだが、このころは母親と散歩している最中ひっきりなしにしゃべり続ける強迫にみまわれた。話題はあちこちに飛び、ナンセンスなことを乱発した。ところが、彼の言い方は漠然としているものの、例を挙げさせてみると、ナンセンスの乱発はどうやら母親から出たものであるらしい。(記.120)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>母親とのおしゃべり強迫</p>
<p>よくあるふつうの計算強迫。たとえば稲光から雷鳴までの間に40ないし50数えなければならぬといった強迫である。(記.120)</p>	<p>たとえば雷鳴の中で彼女と一緒にいたとき非常に恐ろしくなって、「稲妻が光ってから雷鳴が鳴るまでの間に40か50まで数を数えなければいけない」という強迫が再び彼を襲ったのである。もちろんなぜこんな考えが起ってきたのか彼自身にもわからなかった。(著.238-9)</p>	<p>同様追加 (彼女と一緒にいたこと、彼自身の不可思議さ)</p>	<p>計算強迫</p>
<p>一種の保護強迫。従妹と船に乗っていて強い風におおられたことがある。このとき、彼は自分の帽子を彼女にかぶせずにはいられなかった。彼女の身に何も起きたはならないというのは、彼にとっていわば命令のようなものである。(記.120-1)</p>	<p>彼がいつか風の強い日に彼女とボートに乗った時、彼は自分の帽子を無理やり彼女にかぶらせた。「彼女にもしもこのことがあってはならない」という命令が彼に下ったからである。これは一種の保護強迫であって、このほかにさまざまなできごとをひき起こした。(著.238)</p>	<p>同様</p>	<p>保護強迫</p>
<p>理解強迫。彼は、他人が彼に話す言葉のどんな音節も厳密に理解せずにはいられなかった。そうしなければ貴重な宝が逃げ去ってしまうかのように思えた。彼はいつも「なんて言ったのか」と聞き返した。そうして相手が繰り返すと、最初に聞いたときとちがって聞こえたような気がして、ひどく不快な気分になった。(記.121)</p>	<p>彼女の出発後彼の心を苦しめたのは理解強迫だった。その強迫に襲われている時の彼は、家族たちにとって耐えがたい存在だった。彼は、誰かが彼に話しかけた一言一句をとことんまで正確に理解しようとした。さもないと大事な宝が彼の手元から逃げ出してしまふ気がしたのである。彼はいつも「今あなたは何と言いましたか？」と訊き返した。そこで周りの人が今言ったことをもう一度繰り返してやると、「それはさっき言ったことと違うのではないか」と彼には思われて、不満でならなかった。(著.239)</p> <p>この出来事のコアを非常にはっきり説明しているのが、次のような理解強迫である。すなわち「こういう経験をされた以上、もし今度のような思いすごしで苦しむたくないと思うなら、お前はもう二度と他人の言葉を誤解しないようにしなくてはならない」と自分に言い聞かせるという形で理解強迫が成立したのである。しかしこのような決心は、これをきっかけにして一般化されたばかりでなく、もしかしたら恋人が不在だったために、彼にとって一番大事な恋人自身に関することからどうでもよいような他人に対してまで及んだのであった。この強迫は彼女の釈明に彼が満足したために起こってきたばかりでなく、もっとほかの何事かをも表現しているに違いない。なぜならば、一度聞いたことを繰り返してもらっても彼には一向満足が得られないという結果に終わっているからである。(著.239)</p>	<p>同様変更 (不快→不満)追加 (理解強迫の考察)</p>	<p>理解強迫</p>

<p>以上のことは、従妹との関係を念頭に置いて整理しておく必要がある。彼女が彼に釈明したところによると、彼を無視するように見える態度をとったのは、ひとえにコンリットに笑いものにされたいよう彼を守ってやったからだということなのだが、まさに彼女のこの釈明が状況をすっかり変えてしまったのだ。(記 .121)</p>	<p>すべてこのような病気の産物は、当時恋人との関係を支配していたある事件に関係がある。彼が夏前ヴィーンで彼女と別れた時、彼女が語ったある言葉を、彼は彼女が属する交際範囲から彼を遠ざけたがっているのだと解釈した。そしてそれを非常に悲しく思った。その後日女中に彼女と話し合う機会があったが、その時恋人は、彼が誤解して受け取ったあの時の言葉は、むしろ彼を周囲の嘲笑から守ろうと思って言ったことだ、と彼に釈明した。そこでまた彼は愉快になったのである。(著 .239)</p>	<p>同様 変更 (無視するよ うな態度→彼 女の言葉を自 分から遠ざけ たがっている と解釈、コン リット→周 圍) 追加 (夏前ヴィ ーンで彼女と 別れた時)</p>	<p>一連の強迫 と恋人との 関係</p>
<p>保護強迫が後悔と贖罪であることははっきりしている。それに理解強迫さえも彼女に由来するものだ。というも、彼をそれほどまでに左右する重要性を持っていたのは、彼女の言葉だったからである。実際、従妹がやってくる以前にはこんな強迫などなかったのである。そうなると、汎化したことも容易に理解できる。(記 .121)</p>	<p>実はこの保護強迫は、あの釈明を聞く前に自分が恋人に向けた対立的、つまり敵対的な感情興奮に対する反動形成—後悔とその償い—を意味していた。彼が報告した材料によれば、雷雨下で起こってきた計算強迫は、彼女の命が危ういという生命の危険に対する恐怖を解決しようとする防衛方法と解釈することができる。すでにわれわれは最初に述べた強迫観念の分析によって、その気狂いじみた憤怒の様子から察して、この患者の憎悪感情の興奮があまりにも異常な激しさを持っているという事実を理解した。またわれわれは、恋人に対するこの憤怒が彼女との和解した後になってもなお働き続けて強迫症状の形成に参与していることを知った。「果して自分は担任の言葉を正しく聞き取っているかどうか?」という疑惑癖の中には、「自分が今恋人を正しく理解しているかどうか? 恋人の言葉を彼女のやさしい愛情の証拠として受け取ってよいかどうか?」という、いまだに心に残って働きつづけている疑惑が表現されている。この理解強迫の中に含まれている疑惑は、恋人の愛情に対する疑惑である。恋の虜になったこの男の心中には、同一人物である恋人に同時に向けられた愛と悲しみとの相克が荒れ狂っていた(著 .239-40)</p>	<p>示唆 追加 (計算強迫 における恋 人への防衛 と憎悪)</p>	<p>保護強迫に おける後悔 と償い、理 解強迫にお ける疑惑 (愛と悲し み)</p>
<p>これと別種の強迫は、上記の釈明をめぐるやり取り以前にもあった。このことは彼の記憶から確認される。雷に対する計算不安は、神託の性格をそなえているし、自分があとどれくらい生きられるかという死の不安を示している。そうすると、日中のランニングは、実らぬ恋からくる、なにか自殺的なものを秘めていることになる。これらのことをすべて彼は認める。(記 .121)</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>強迫と死の 不安、自殺 念慮</p>
<p>ウンターラッハに旅立つ前、彼は友人のリンガーに、今回は、もうヴィーンには戻ってこないという奇妙な確信めいた気持ちがあることを伝えた。はっきりとした自殺観念は、子どもの頃から彼には馴染みのものだった。たとえば、悪い成績表をもって帰ってくると父親の気持ちを損ねることを彼は知っていた。ところが、こんなことがあった。彼が18歳の時のある日、母方の叔母が訪ねてきた。彼女の息子は一年半前に自殺した。かなわぬ恋のためだったらしい。そこで彼は考えた。その息子がいつとき夢中になっていた、あのヘートヴィヒのせいで自殺したのだ、あいかわらず彼女の思いをひきずっていたのだ、と。この叔母はとても打ちひしがれており、哀れな様子だったので、それを見た彼は“どんなことが起きようとも、たとえ失恋するようなことがあっても、母親のために自殺など断じてしないぞ”と心に誓った。(記 .121-2)</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>自殺観念と 母親を悲し ませないた めのその禁 止</p>

<p>ある日、彼が炎天下のランニングから帰ってくると、妹のロザリーエがこう言った。「今に見てなさい、エルンスト、そんなことをしているといつか倒れるわよ」。だが、自殺衝動が前述の彼女の釈明より前に生じていたのだとすれば、これは、彼が怒りにまかせて従妹の死を望んだことからくる自己処罰でしかありえなかった。(記.122)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>炎天下のランニングと恋人の死を望む自己処罰</p>
<p>私は彼にゾラの『生きる喜び』を読むよう勧めた。(記.122)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>患者への読書のすすめ</p>
<p>続けて彼は次のように語る。従妹がウンターラッハを出立する日、路上に石が転がっているのを見つけ、彼女の場所がこれにつまずいて、彼女がけがをするかもしれないと想像した。そこでこの石を除けたのだが、20分ほどして、やっぱり馬鹿らしいことだと思い、戻ってきて再びその石を元の位置に置き直した。この話からわかるように、ここでもまた、彼女に対する敵対感情が保護感情と共存していたのである。(記.122)</p>	<p>彼女がその土地を出立する日、彼は街路に転がっている石を足で蹴飛ばしたが、ただちにそれを道の隅にどけなければならなかった。これは、「数時間以内に彼女の馬車がこの街路を通り、もしかしたらこの石に当たって怪我でもしたらたいへんだ」という考えが起こってきたからである。しかしその数分後に、それはやはり馬鹿らしい心配だと気付いた。そして今度はそこへ戻ってその石を街路の真ん中の元の位置に再び置き直さなければならなかった。(著.239)</p> <p>そしてこの相克は、強迫的でしかも象徴的な意味をもった行動、たとえば彼女の車が通ることになっている道筋の石を取り除き、それからこの愛の行為を逆戻りさせて、馬車がその石につまずいて彼女が怪我するように石をわざわざ元の位置に戻したりする強迫的な行動によって具体的に表現されている。もしわれわれがこの強迫行為の第二の部分（石を元に戻した行為）を、彼自身がそう説明しているように、「自分の病的な行為に批判を抱いてそれを回避しようとしたのだ」と解釈するだけでは、それを正しく理解したことにはならないのである。その際彼自身も強迫館を抱きながら行動したということは、たとえその行為の第二の部分が第一の部分の動機に逆らうことを目指していたとしても、なお第二の部分そのものもこの病的行動の一部をなしていたことを意味している。(著.240)</p>	<p>同様追加 (強迫の考察)</p>	<p>恋人の乗る馬車の通る街路に落ちている石をどけたり置き直す強迫(恋人への保護感情と敵対感情)</p>

表2 第41セッション（1907年12月2日）

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
<p>St. 博士の病気と死去のために中断。彼はこの人を父親のように遇していたが、さらに個人的親交を結ぶまてになった。もっともこの友好関係にはあらゆる種類の敵対的な特徴が現われている。彼のねずみ願望は、St. 博士がホームドクターとしてランツァー家から金を受け取っていたことに由来する。「こんなに多くのクロイツァー貨幣、こんなに多くのねずみ」、彼はそんな独り言を言う。まるで葬式の場で献金箱に金を投げ入れているかのようだ。彼にしてみれば、自分と母親と同一化することで、博士に対する憎悪を個人的に正当化することだってできるのである。というのも母親は、仕事から身を引くよう父親に勧めなかったとって博士のことを非難しているからである。彼は葬式に参列するたびに奇妙な笑みを浮かべてしまい、いつも煩わしく感じる。この笑みは、墓地に向かう途上でも浮かんでしまう。なお彼は、St. 博士が妹のオルガを強姦する、という想像を抱いたことをほめかす（おそらく診察という医療行為に対する羨望だろう）。(記.123)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>家庭医の死と彼に対する友好的かつ敵対的感情。ねずみ願望、母親との同一化</p>
<p>ここからさらに、オルガが10歳のとき、パパが彼女に何か下品なことをしたに違いない、という記憶が呼び起こされる。オルガの部屋から叫び声が聞こえ、ついでパパがその部屋から出てきて、「まったく、あの娘の</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>妹オルガへの父親の下品な行為に関する記憶</p>

尻は石のようだ」と言ったというのである。父親に対して本当に怒りを覚えたというが、奇妙なことに彼は、論理的な根拠づけはすべて洞察しているはずなのに、怒りを覚えたという確信から一歩も出ることはなかった。(記.123)			
これに結びつくーといって、これのどこに結びつくか断定できないがーある転移空想。二人の女性、つまり私の妻と私の母が、1匹のニシンでつながっている。たがいの肛門に、ぴんと張って伸びた1匹のニシンが入り込んでいるものだ。ついに一人の少女がそのニシンを断ち切る。すると、二つの部分も（はらわたがとりだされるように）抜け落ちる。(記.123)	－	省略	ニシンの転移空想（フロイトの妻と母）
この点に関して、ようやく彼は、ただ一言、自分はニシンが大嫌いだと告白する。ついこのあいだ彼の食事にニシンが提供されたとき、彼は手をつけなかった。先の少女とは、彼が階段で見かけた少女であり、彼はその少女を私の12歳になる娘だと思い込んだのである。(記.123-4)	彼は私の家の階段で一人の少女に出会った。彼はこの若い少女を私の娘だと思い込み、すっかり気に入ってしまった。そして彼は私（分析医）が彼に親切で信じがたいほど忍耐強いのは、実は私が彼を娘の婿にほしがっているからと空想した。彼は私の家の財産や名誉を、自分の理想に合うようにいろいろと実際以上に高く評価していた。(著.246)	省略 示唆	フロイトから提供された食事の拒否、フロイトの娘との空想

表3 第42セッション（1908年1月2日）

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
今日の午前中にロザリーエがどうしてもいっしょに映画に行きたいといってきかなかったので、彼は大いに腹を立ててしまった。これほど怒ったことには自分でも驚いている。彼はそのときすぐに、ロザリーエなどねずみにでも食われてしまえと思ったが、次いで、今から一緒に行くべきか行かぬべきかと迷い始め、しかも、いったいどちらに決めれば強迫に屈したことになるかと疑いだした。(記.125)	－	省略	姉ロザリーエへの腹立ちと迷い
ロザリーエはこんなだだをこねることで、お針子とのデートの約束と、病気の従妹への訪問をじゃましたのである。ちなみにこれは彼の言葉そのままである。彼が今日不機嫌なのは、従妹の病気のせいなのかかもしれない。(記.125)	－	省略	姉ロザリーエ、お針子、恋人との関係
それに、彼の言うには、今日はたいした話はないということなので、私の方からたくさん言ってやる事ができる。彼がロザリーエなどねずみにでも食われてしまえと願望している間、もう一方で彼自身は自分の肛門にねずみが食らいついていると感じて、そのねずみをありありと思い浮かべているのだ。私は、ねずみの件に新たな光を感じる、ある関連付けを打ち立てる。 —あなたには寄生虫がいたでしょう。寄生虫対策としてどんなことをしてもらいましたか？ —錠剤をもらいました。 —浣腸もされたのではないですか？ —ええ、確かに。そんなこともあったように思います。 —だったら、たぶんその浣腸が何にもまして嫌だったでしょう。その背後に抑圧された快感が潜んでいたからです。 彼は嫌がったことも認めた。 —それ以前に、肛門がかゆかった時期があったはずですが。ニシンの話で私が思ったのはまさにこの浣腸のことです（この前提として、「成長して自分の喉を通して出てくる」という彼の言い方がある）。 —別の寄生虫、たとえば真田虫もいたのではないですか？寄生虫に対し、ニシンがその代わりとして出てきているものです。あるいは、せめてその寄生虫のことを耳にするくらいのはあったでしょう？ —そんなことはありませんでした。 —いいながらも、彼は寄生虫の記憶について話を続ける。(記.125-6)	－	省略	肛門にねずみが食らいついているという空想、フロイトの解釈（寄生虫とそのための浣腸、その背後にある抑圧された快感）

10歳のとき、彼の従兄弟が排便しているところを見たことがあった。このとき、従兄弟が自分の便の中に大きな寄生虫がいるのを彼に見せたのである。彼は強烈な吐き気を覚えた。(記.126)	-	省略	従兄弟の寄生虫の記憶
これと並んで、彼が人生における最大の驚愕とみなしている出来事がある。たぶん6歳より前であろう。母親が帽子から剥製の鳥を取り外した。彼はそれを借りて遊び道具にした。その鳥を掌に包んで走りまわっていると、翼が動いた。鳥が生き返ったのだと思つて、彼は驚愕のあまりその鳥を投げ捨てた。姉の死—この出来事は姉の死後に生じたはずだ—と関連しているのではないかと私は考え、このとき信じ込んだことが後に父親の甦りを容易にしたのだと彼に指摘する。(記.126)	彼が3歳から4歳の間に起こった出来事であった姉の死は、彼のさまざまな空想中で大きな役割を演じ、その頃の幼児的な悪行と内的に密接に連関していた。(著.272)	省略 示唆	剥製の鳥の蘇生の記憶、フロイトの指摘(父親の蘇生)
私の指摘に彼が何の反応も見せないで、私は別の観点から解釈してみせる。つまり、手淫による勃起である。死との関連性は、彼の先史時代において「ペニスに触って勃起させていると死ぬぞ」と脅かされていた点、そして自分の自慰のせいで姉が死んだと彼が思っていた点に示されている。彼は、これほど—しかもすでに子供の時分から—勃起に悩まされていたのに、思春期になってからは決して自慰をしなかったことに驚いている自分のことを考えれば、私の言うことも納得できるという。(記.126-7)	-	省略	手淫による勃起と死、自慰と姉の死
その子供の頃の出来事として、自分のペニスが勃起している姿を母親に見せている光景。彼によれば、ようするに自分の性的素質は、ルドルフ嬢やその他の婦人を眺めているだけでいいといった程度のものであった。そして、魅力的な女性が裸になっているところを想像するたびに勃起していたのである。彼は、女子用の温水プールにいた12歳と13歳の女の子についての鮮明な記憶を語る。彼女たちの太股を見て、自分の姉妹もこんなに美しい太股をした女の子がいたらどんなに良いかと思ったというのである。次いで、男友達に対するホモセクシュアルな時期がやってくるのだが、互いに触りあうわけではなく、ただじっと見つめているだけであった。それで満足だった。彼にとって、見ることに触ることの代わりになっていたのである。(記.127)	-	省略	母親に勃起を見せた記憶、魅力的な女性の裸体、同性愛的な時期、視覚欲求
私は彼に、夜の勉強のあとで姿見に自分を映していた場面のことを想い出させる。そのとき彼は自慰をしていた。つまり、私の解釈によれば、父親を喜ばせるために勉強した後に、父親への反抗として自慰をしたのである。いわば、「神よ、彼を守り給え」が「守り給うな」となっているようなものである。ここにどんな関連があるのかについては不問にしまま、私たちは先に進む。(記.127)	彼が試験勉強中に、父が実はまだ死んでいなくて、いつここにやってくるかもしれないという彼の好きな空想に耽っていた時の、彼の奇妙な振舞いも同じような関係から理解することができる。当時彼は、なるだけ勉強が深夜にかかるようにしていた。夜の12時と1時のあいだに彼は勉強を中断して、玄関へ通ずるドアを、まるで父がその前に立っているかのように開けてみて、また戻ってきてから、次の間の鏡の前で自分のペニスを露出して眺めたのであった。この気狂いじみた振る舞いは、彼が草木も眠る丑三つ時という幽霊の出る時刻に本当は死んでいた父の訪問を期待するかのよう振る舞った、という事情を考えてみるとよく理解される。父が生きていた時代には、むしろ彼は父がときどき頭を痛めたほどの怠け学生だった。ところが今は、もし父が幽霊になって現われ勉強中の彼に生き会ったらさぞ喜ぶだろう。しかし父は、彼のその行為の裏面にある別な行為を見たら喜ぶわけにいかないだろう。この点で彼は、父親に反抗していたのである。このように不可解な強迫行動によって彼は、父と自分との関係の相矛盾する二方面を表現していたのである。(著.250)	示唆 同様	父親を喜ばせるための勉強と反抗するための自慰

<p>彼はミュンヘンで見た寄生虫夢のことを語り、そこから翌朝の急激な便意についていくつか手がかりになることを話す。このことがのちにニシンの転移幻想につながっていくのである。「まるで遊ぶような、いとも簡単な手さばき」で難しい作業を成し遂げた子供に話が及んだところで、彼は、ミッツィ・ベルルムッターという可愛い少女のことを思い浮かべる。彼女の家族と交際していたとき、少女は8歳であった。そのころ彼はまだドクターの資格を取っていなかった。早朝6時にザルツブルクに行く。彼はとてもいらいらしていた。というのも、もうすぐ我慢できない便意に襲われることがわかっていたからである。そして実際にそれがやってくると、彼は口実をつくって駅に降りた。なんとか列車に飛び乗ったものの、乱れた服装を整えている現場をベルルムッター夫人に見られてしまったのである。こんなことがあって、その日はずっと、夫人に対して恥をさらしてしまったという屈辱感を抱いたまま一日をすごした。(記.127-8)</p>	-	省略	便意、ニシンの転移空想、空想の子供とある少女、便意と夫人への屈辱感
<p>すると、それに関連して、彼の頭にふと1頭の種牛が浮かび、中断する。彼の言うところでは、これは目下の事項には関係のない思いつきなのだそうだ。彼はシュヴェニンガーとハルデンによる対談形式の講演会場で、そのころ大いに尊敬していたヨードル博士に出会い、しかもそこで博士と言葉を交わしたことがあった。彼も十分知っているように、「ヨードル」はまさしく「種牛」を意味する。(記.128)</p>	-	省略	種牛とヨードル博士との思い出
<p>当時、シェンタンが夢を記した小品を発表した。シェンタンは、シュヴェニンガーとハルデン二人の合体した人物になっている。こうしてシェンタンは、尋ねられればどんな質問にも答えていたため、とうとう「なぜ魚には毛が生えていないのか」といった問いにまで答えるはめに至った。答えが浮かぶまでさんざん冷や汗をかいたあげく、次のように述べる。「周知の通り、鱗は毛の成長を阻害する。それ故、魚には毛が生えないのである」と。なぜニシンが彼の転移幻想のなかに現われたのかはこれによっははっきりする。以前に彼がこう語ったことがある。彼の恋人が腹ばいに寝ていて、後ろから陰毛がはみ出ているのが見えたというのである。そのとき私は、最近の女性が下の毛の手入れをおこたっているのは残念だと思うし、だいいちみっともないではないかと言った。彼が二人の女性を無毛にしたのも、こうした事情による。(記.128-9)</p>	-	省略	魚の無毛と女性の陰毛
<p>私の母親は、彼自身一度も会ったことのない自分の祖母を意味しているのだそうだ。ところが、ふと彼の心に従妹の祖母が浮かんでくる。二人の女性が家政をとりしきっている家。私が軽い食事を彼に出したとき、彼はすぐさま、この食事は二人の女性が用意したものだったという。(記.129)</p>	-	省略	フロイトの母=患者の祖母、自分の祖母と恋人の祖母がフロイト家の家政をしきっているという転移空想

表4 第43セッション (1908年1月3日)

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
<p>ねずみが寄生虫であるなら、それはペニスでもあるのだ。私は思い切って彼にそう切り出す。だとすると、彼の型通りの言い回しは、要するに、性交渉を求めるリビドー表出なのであって、つまり古層に由来する表現をまとい、(肛門性交という幼児的な性理論)、願望と憤怒という両面を備えつつ、リビドーが性交渉をめざして表出されているにすぎないのだ。ちょうど「おかま堀り」という南スラブの罵言が同じような二面性を持つように。</p>	<p>また考えようによっては、梅毒感染の媒介者はペニスそのものであった。したがってこのような男性器の役割という点から見て、鼠は男性器の象徴というもう一つの意義を持つようになった。ペニス、とりわけ幼児のペニスを回虫として描きだすのは容易なことである。例の大尉の話の中では鼠が処刑される人の肛門の中で暴れ廻ったのと同じことであった。このように鼠がペニスの意味(ペニス象徴)を持ったのも、やはり彼の肛門性感に基づいていたのである。(著.257)</p>	示唆	ねずみ=ペニス、願望と憤怒を備えたりビドー表出というフロイトの解釈

<p>今日これを持ち出す前に、彼はこのあいだの幻想が解決したことを、とてうれしそうに私に伝えている。私の学問は、楽しくなるほど卓越した手並みと「微笑みを誘う才覚」で、彼の観念から偽装を剥ぎ取り、二人の女性を彼のニシン願望から解き放つ子供だというわけである。(記.130)</p>	-	省略	ニシンの転移空想の意味
<p>私は彼にこう言った。ねずみはペニスである、それは寄生虫（このとき彼はすぐ言葉を差し挟んで「小さいペニス」と言う）を介してねずみの尻尾、尻尾＝ペニスとなるのだ、と。すると、さまざまな思いつき—それらすべてが関連しあっているわけではないが、大部分は彼の想像物の願望をなす側面から来るもの—が、文字通りの洪水となって彼を呑み込む。ねずみ観念の前史にかかわる何ものか、ただし彼の目にはいつもねずみ観念に結びついている何ものか。(記.130)</p>	-	省略	フロイトの解釈とさまざまな連想の洪水
<p>この観念が形成される数ヶ月前、彼は路上である女性と出会った。その女性を見て、すぐさま彼は“彼女は娼婦だ、さもなくば少なくとも連れの男と性的関係にある”と思った。彼女の独特の微笑みを前にして、彼は奇妙な考えを抱いた。“従妹が彼女の身体のなかにいる、彼女の性器には従妹の性器が隠れていて、性交のたびに何かを手に入れる、すると彼女の中に潜んでいる従妹が膨れ上がり、その女性を破裂させる”というものである。もちろん、この意味するところは、従妹の母親すなわち叔母のリーナだということにほかならない。(記.130)</p>	-	省略	路上で出会った女性への娼婦幻想と奇妙な考え（女性のなかに恋人がいて、女性が性交するたびに恋人が膨れ上がり、女性を破裂させる）
<p>かくて、叔母は娼婦とたいして変わりはないとするこの考えを経由して、ついに叔母の兄弟である叔父アドルフに結びつく。というのも、アドルフはリーナに「おまえはまるで売女のようにセックスをする女だ」とあからさまに侮辱していたからである。この叔父は、ひどく苦しんだはてに死んだ。しばし沈黙の後にランツァーは、叔母を娼婦と同一視したせいで自分もまた罰せられるのではないか、という脅迫めいた思いを抱き、慄然とする。(記.130-1)</p>	-	省略	叔父アドルフの叔母アドルフへの性的侮辱
<p>次いで、いろいろなことが彼の心に浮かんでくる。自分が望んでいたのはまさに従妹との性交渉だった—これはねずみ理論を思いつく以前のことであり、ねずみ理論はときに「従妹にねずみを持ってきてやらねばならない」という形をとるとか、さらには多くの金銭と結びついて、自分の理想は、性交の直後でもすぐにセックスできるようにいつも準備ができていたことだった、とか、そんなことが思い浮かんでくる。ことによると、彼がああ世への移動を考えているのは、こうした事情からなのか。(記.131)</p>	-	省略	恋人との性交と金銭の準備という連想
<p>父親の死から2年たって、母親がこんなことを彼に言った。“財産から支出した分は儉約によってすぐに取り戻してみせる”と父親の墓前で誓ったんだよ、と。彼はその誓いを信じてはいないが、彼の儉約の主要動機はここにある。こうして彼は、(彼らしいやり方で)ザルツブルクではもう月に50フローリン以上は遣うまいと誓ったのである。後には、「ザルツブルクでは」という但し書きを付けたかどうかもあやふやになって、“どんなことがあっても金を遣ってはならないし、決して従妹と結婚してはならない”と思うようになった（このことは、叔母のリーナに関する娼婦幻想と同じく、従妹に対する敵対的な流れにさかのぼる）。これに反してもう一方では、“従妹が彼の思い通りになりさえすれば何も結婚する必要はないんだ”と思ったりもする。すると、またしてもこれに対する異議がもちあがってきて、“だったら売春婦の場合と同じように、セックスする度にグルデン貨を払わなくてはならなくなるぞ”と思う。こうして彼は、「こんなにたくさんのグルデン貨、こんなにたくさんのねずみ」（こんなにたくさんの尻尾＝ペニス—性交、こんなにたくさんのグルデン貨）という譚妄の萌芽を見出ししていくのである。(記.131-2)</p>	鼠譚妄の意味の範囲が、この新しい意味付けによってどれほど拡張されたかはいうまでもないことである。たとえば「そんなにたくさんの鼠—そんなにたくさんのグルデン貨幣」という言葉は、彼が特に嫌悪していた夫人の職業（売春業）の適切な特徴描写と見なすことができた。(著.257)	示唆	儉約の誓い、恋人との結婚の禁止、性交（ねずみ）＝金

いっさいの娼婦幻想が彼の母親に帰着することはいうまでもない。この結びつきをもたらしたきっかけは、彼が12歳のとき、従兄弟の一人が意地悪く、ランツァーの母親は娼婦だ、それっぽい素振りを見せる、とともっともらしい話をしたことがある。母親の髪は今はとても薄くなっているが、彼女が櫛でとかすとき、よく彼は東ねたその毛を引っ張って、「ねずみの尻尾」と呼んだりする。(記.132)	-	省略	母親への娼婦幻想
彼が子供の頃、ベッドに寝ていた母親が、不注意に体を動かして尻を見せたことがあった。このとき彼は“結婚しているということは、お互いにお尻を見せ合うことなんだ”と思った。また、弟と同性愛的な戯れをしていた最中に、とてもびっくりしたことがある。風呂のなかで取っ組み合いになり、そのとき弟が自分のペニスを彼に肛門に向けたのである。(記.132)	-	省略	母親の尻と弟のペニスに関する記憶
その他に思いついた事柄のなかには解釈しきれていないものが数多く残っている。そして、私に対するいくつかの敵対的な転移も(記.132)	-	省略	フロイトによるセッションの振り返り

表5 第44セッション(1908年1月4日)

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
上機嫌だ。今まで以上にたくさんの思いつきや、数々の転移、その他いろいろあるが、われわれはこれらについて、今は解釈しないことにする。	-	省略	セッションの様子
ニシンの結び目をほどいた子供—すなわち学問—に関連する空想として、“彼がこの子供に足蹴りにし、それから父親が窓ガラスを叩き割る”というものがある。(記.133)	-	省略	ニシンの転移空想に関する空想
これについては、彼が父親に恨みを覚える理由となった話がある。かつて彼は、ギムナジウムでの初めての宗教の授業をさぼり、その事実を下手に否定したところ、父親はとてものがっかりしたようで、彼がロベルトに殴られたことを訴えると、父親は「いいだろう、だったらそいつを蹴っ飛ばしてやればいい」と言ったのである。(記.133)	-	省略	父親に恨みを覚える思いつき
これとは別に、シュタインベルガー博士の蹴っ飛ばし話がある。今はランツァーの義弟になっているヤコブ・Fは、かつてオルガと、シュタインベルガー博士の娘—現在はヴェルナーという姓である—との間でずっと揺れ動いていた。いよいよ決断を下さねばならなくなったとき、ランツァーは親族会議を招集し、ヤコブを愛しているどちらかがヤコブに「私のことを好きか否か」を直接問い糺せばいい、と助言した。するとシュタインベルガー博士が、「よろしい、お前があいつを愛しているのなら、それもいいだろう。ただし今夜(デートのあとで)、あいつの尻についたお前の靴跡を見せてくれたら、ほっぺたにキスしてあげよう」と言った。シュタインベルガーはヤコブをまったく好いていなかったのである。(記.133)	-	省略	家庭医の娘と患者の妹オルガとの間での義弟ヤコブの心の揺れ
彼は突然、こんなことも思いつく。この結婚話はザボルスキー家に惹かれる自分の気持ちと結びついている。シュタインベルガーの妻は、ザボルスキー家の出である。そしてもしヤコブが彼の娘と結婚していたら、彼が家族を支える唯一の候補者になっていただろう。それからさらに、義弟のヤコブについて、ヤコブはランツァーにとっても嫉妬しているということである。昨日、ヤコブが妹に直接そう言っているところに出くわしたという。女中たちでさえ口々に、オルガはランツァーのことを兄弟というよりも恋人のように愛しているし、キスしたりする、と言っている。彼自身、昨日—しばらくのあいだ妹と別の部屋ですごしたあとで—義弟に向かって、「オルガがいま妊娠9カ月だとしても、その子の親がわたしだと思わなくていい。わたしは無実だよ」と言ったのである。彼は以前から、“自分は下品な振舞いをしなければならない、そうすれば妹も、弟と兄とのいずれかを選択する際に、兄の方を取る理由はなく”と思いついたというのである(記.133-4)	-	省略	妹オルガとの恋人のような関係、義弟ヤコブからの嫉妬

<p>以前に私は、ある転移の解決として、彼にこんなことを述べた。彼が私に対して下劣な奴、すなわち義弟の役を演じていること、そして、それはオルガを妻にできなくて残念だという気持ちを示しているということである。ここにこそ、下劣な振舞い—それはきわめて複雑な形で表現される—について彼がこのところ抱いている譎妄の意味があらわれているのである。転移というのは、次のようなものだった。かつて私は彼に食事を出したことがあるが、この食事に関して利益を得たのは私の方であり、それというのも、この食事のせいで彼は時間を無駄にし、治療が長引いてしまったからだ、ということである。彼が報酬を用意していたとき、ふと彼の頭に浮かんだのは、この食事代として70クローネ余分に支払わねばならないということだった。この想念のもとにあるのは、ブタベストのミュージックホールで行われたある小劇である。その劇のなかで、か弱い花婿が、ウェイターに向かって、自分の代わりに花婿と初夜の交わりを引き受けてくれたら70クローネあげようと申し出るのである。（記.134）</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>フロイトへの義弟転移、フロイトの提供した食事に対する不満と罪悪感</p>
<p>以上のことが示唆しているのは、“治療に関して友人ガラツァーの述べた意見に左右されて自分が治療を放棄してしまうのではないか”と心配している彼のあり方である。彼によれば、私が彼の考えのいくつかを褒めるたびにとても嬉しくなるが、すると次には第二の声が聞こえてきて、「そんな賛辞などどうでもいい」、あるいはもっとはっきりと「そんな賛辞なんか糞くらえ」と告げるそうである。（記.134）</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>フロイトの賛辞に対する嬉しさと拒否</p>
<p>ねずみの性的な意味については、今日は話題にのぼらなかった。彼の敵意はずっと顕著になってきており、私に対してうしろめたさを感じているかにみえる。彼の下の毛の具合が彼にハツカネズミの毛皮を想起させたようで、このハツカネズミは彼にとってどうやらあのねずみと関係しているらしい。これが彼自身の用いている「マウズィ」という愛称の意味であるということに、彼は気づいていない。彼が14歳のとき、ある不良の従兄弟が、彼と彼の兄弟に向かってペニスを見せ、「おれのは原生林のなかに住んでいるぜ」と言ったことがある。が、そのときに彼には「ねずみを捕るんだぜ」と聞こえたという。（記.134-5）</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>陰毛とねずみ</p>

表6 第45・46セッション（1908年1月6日と7日）

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
<p>上機嫌で、にやにや笑っている。何かたくらんでいるかのようだ。</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>セッションの様子</p>
<p>ある夢といくつかの断片。彼は虫歯を抜いてもらうために、歯医者へ行く。ところが、歯医者が抜く歯は、しかるべき歯ではなく、軽い虫歯の隣の歯なのだ。取り出した歯を見て、その大きさに医者は驚きの声を上げる。（これについては、のちに二つほど補足する。）（記.136）</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>歯医者に 行って抜歯 してもらう 夢</p>
<p>彼の虫歯は、痛みはなく、ただときどきかすかに疼く程度である。かつて一度、歯医者に行って詰め物治療をしてもらおうとしたことがあった。しかし歯医者は、抜歯しかない、と告げたのである。彼はふだんは憶病者ではなかったが、このときばかりは、痛みが何らかのかたちで従妹に害を及ぼすのではないかと思っしりごみし、抜歯を断わった。おそらく彼は、夜になると歯のかすかな疼きを覚え、それでこんな夢を見たのだろう。しかし夢というものは、こうした軽い感覚よりもっと強い感覚を無視することもあるし、実際に痛みを感じていたとしてもそれとは関係ない場合もありうる。歯の夢がもつ意味をわかっているのだろうか。（記.136）</p>	<p>—</p>	<p>省略</p>	<p>歯の治療で 抜歯を断 わった現実</p>

<p>親類の死のことをおぼろげに想い出す。「ええ、ある意味では。自慰の夢なのです。下から上への移動です。」「えっ、どうしてそうなるんですか?」「顔と性器とを同じように扱う言い方がありますよね。」そんなこと彼も承知である。「でも、下には菌はないでしょう。」そのとき彼は、だからこそということを理解する。さらに私は「樹から枝をもぎ取る」も同じ意味をもってると彼に言う。彼は「降ろして自分の一物を引きずり出す」なら知っている。ところが彼は、自分自身で菌を引き抜いたわけではなく、他人に抜いてもらったのである。(記.136)</p>	-	省略	抜菌の夢と自慰
<p>彼の告白によれば、例のお針子と一緒にいると、彼女にペニスを握ってもらいたくてしかたがなくなるし、どうしたらそうしてもらえるかも知っているという。もう彼女には飽きたのかという私の問いに、彼は驚きながらもうなづく。彼女が彼を金銭的に破滅させるのではないかと不安を抱えていること、彼女には愛人としてふさわしいほどのものを与えていることを、彼は告白する。そこからわかるのは、彼が金銭問題に関してきわめてルーズで、何の記録も残していなかったということであり、だからこそ彼は、彼女のために一月いくら使ったか言えないのである。それだけでなく、友人に100フロリン貸したというのである。私に見抜かれたと思ったのか、彼はもう彼女との情事にうんざりしていて、禁欲状態に戻りつつあることを認める。(記.136-7)</p>	-	省略	お針子との性的関係、ルーズな金銭感覚
<p>これについては別の解釈も可能だ、と私は述べる。が、その解釈を彼に言うつもりはない。抜かれる菌がしかるべき菌ではなかったというのは、いったいどういうことなのだろうか? (記.137)</p>	-	省略	フロイトによるセッション中の解釈と振り返り

表7 第46セッション (1908年1月7日)

診療録	公刊された論文	比較	テーマ
<p>彼は自分の狡猾な病気が何かたくらんでいるように思えてくるという。またしてもお針子とよりを戻す気になったのである。だが、二度目の性交では射精できなかった。射精する代わりに放尿してしまうのではないかと不安に駆られた。小学校の5年生のとき、同級生の一人が、人間の生殖というのは男が女のなかにおしっこをすることなのだ、と彼に言ったことがある。コンドームを持ってくるのを彼は忘れてしまった。彼がお針子との情事にうんざりしているのは明らかである。たとえば、性交の中断、インポテンツ、不快感。(記.138)</p>	-	省略	お針子との性交、放尿への不安
<p>彼は昨日さらに補足して、その菌はぜんぜん菌らしくなく、むしろチューリップの球根みたいで、その球根はスライスした玉葱の薄片を思わせると語る。さらにすすんで、菌、彼の停留睾丸、従妹の手術まではつきあってくれない。(記.138)</p>	-	省略	前回の菌の夢の連想
<p>手術に関して彼が語るころによれば、そのときは嫉妬で我を忘れるほどたまったということである。サナトリウムで彼女に付き添っていたとき(1899年)、ある若い医者が回診に来て、寝ていた彼女の毛布の下に手を差し入れたのである。これが医者としての当然の行為なのかどうか彼にはわからなかった。彼女がどれほど勇敢に手術に耐えたかを聞かされたとき、彼はばかげた考えを抱いた。それは、彼女が手術に耐えられたのは、自分の美しい身体を医者たちに見せることを彼女が楽しんでいたので、というものである。私がこの考えをそれほどばかげたこととみなさなかったため、彼は驚いた。(記.138)</p>	<p>彼が長年崇拜しながら結婚に踏み切れなかったあの恋人は、婦人科手術で両側の卵巣を摘出された結果、不妊症と診断されていた(著.259)</p>	省略示唆	恋人の手術、その成功と美しい身体

<p>1899年に彼女と恋に落ちた時、彼は姉のヘートヴィヒから彼女の美しい身体について聞かされたことがあった。ヘートヴィヒ自身が素晴らしい体つきをしているだけに、これは彼に強烈な印象を与えた。彼の恋心の源泉はここにあるのかもしれない。彼とヘートヴィヒが話していたことがどういふことか従妹はよくわかっていたので、顔を赤らめた。後に自殺したお針子のロイヒトマン嬢でさえ次のように言ったという。ランツァーはほかにもっと美しい女性がいるのを知っているくせに、世の中でもっとも美しい女性といえは従妹こそその人だと考えていることぐらい、充分わかっている、と。(記.138-9)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>姉ヘートヴィヒの美しい身体</p>
<p>そう、その歯はベニスであり、彼はそれに気づいているのである。なぜなら、その歯が滴をたらしていた、という補足があるからだ。-ところで、歯医者が彼の「歯」を抜いたのはどういうことを意味しているのか？これが彼の尻尾=ベニスを引き抜く手術であるということに彼にわからせるだけでも容易なことではない。しかも、巨大なベニスとはもっぱら父親のベニスでしかありえないことは単純明白であるのに、それもなかなかわかってもらえない。とうとう彼は、父親への「しっぺ返し」であり復讐であることを認める。まさに夢の口はととても重くて、そうした不愉快な記憶をなかなか明かしてくれないのである。(記.139)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>夢の意味(歯=ベニス、抜歯=去勢)</p>

表8 第47セッション（1908年1月20日）

<p>長い中断。とても機嫌が良い。材料はたくさんあるし、ずいぶん進展した。(記.140)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>セッションの経過と様子</p>
<p>何も解決していない。たまたま説明のついた事柄がある。肥満を避けるために炎天下を走り回ったことが、彼の嫌っていたアメリカ人の従兄弟ディック(リチャード)-枕詞-と関連している、ということである。この説明は私にとっては掘り出し物なのだが、彼はそれを一顧だにしない。(記.140)</p>	<p>われわれの患者にこのわけのわからない強迫行為を説明する手がかりが与えられたのは、彼がふと、ちょうどそのとき彼の恋人も同じ地に避暑に来ていたのであるが、彼女を追い廻している英国人の従兄を伴っており、その男のことで自分が非常にやきもちをやいていることに気づいた時であった。その従兄はリチャードという名前前で、英国で言い慣らされているように、みんなに太っちょ Dick と呼ばれていた。こうなってくると、彼は今度は、このディックを殺したくなった。彼は自分の口で言い尽くせぬほどこの男をねたみ、憤っていた。そのために自己処罰として、あの痩せ療法の苦痛まで背負い込んだのである。こうなるとこの強迫衝動は、以前の直接的な自殺命令とは異なっているように見える。しかしながら重要な一つの点、すなわち意識面からは理解できないような恋敵に対する激しい憤怒への反動として発生した、という点に両者の共通な特質が認められるのである。(著.238)</p>	<p>同様追加(考察部分)</p>	<p>恋人の従兄ディックへのやきもち、炎天下のジョギング、痩せ強迫</p>
<p>今日の五つの夢のうち、四つは軍隊にかかわるものである。その最初の夢が明らかにしているのは、将校たちに対する抑制された怒りであり、彼らのうち、卑屈なウェイトラーのアドルフの尻を蹴とばした一人に決闘を申し込んでやろうという気持ちを自制したことである。この話は、どこかに落としてなくして鼻眼鏡を介して、ねずみの光景に行き着く。さらには、大学一年生のときの体験にも関連している。(記.140)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>軍隊にかかわる夢、将校たちに対する抑制された怒り</p>
<p>彼は、ある友人から「臆病者」だという嫌疑をかけられたのである。というのも、学生仲間一人からびんたを食らったため、ガラツァーの冗談めかした提案で決闘を申し込んだが、結局、事を果たさなかったからである。友人ガラツァーに対する押し殺した怒り-ここからガラツァーの権威が生ずる一、彼を裏切った者や、のちに彼が実を犠牲にして助けてやった者に対する同様の怒り。こうして、憤怒衝動がますます押し殺されていくにつれて、抑圧されたエロスの汚れ衝動が回帰するのである。(記.140)</p>	<p>-</p>	<p>省略</p>	<p>友人ガラツァーへの押し殺した怒り</p>

3. 考察

セッションの内容の多くは公刊された論文で省略されており、それは主として次の点であった。

第1に、母親に関する内容が省略されていた。この点は先の検討でも指摘している（佐藤・鏞, 2003, 2004b; 鏞・佐藤, 2010）。省略されていたテーマをあげると、「母親とのおしゃべり強迫」「母親を悲しませないための自殺観念の禁止」(#40)、「母親との同一化」(#40)、「母親に勃起を見せた記憶」(#42)、「母親への娼婦幻想」「母親の尻に関する記憶」(#43)などがある。先のセッションと比べると、母親に関する言及は嫌悪、軽蔑、敵対感情などが影をひそめ、かわりに罪悪感や同一化、さらには性的で近親相姦的な内容が語られるようになっていく。なかでも「母親とのおしゃべり強迫」(#40)については、同セッションのほかの強迫は公刊された論文に詳細に取り上げられているのに対し、この強迫だけ取りあげられていない。ほかの強迫はすべて恋人との関係から生じていることから、強迫それ自体を省略したかったというよりも、母親との関係を省略したかったためと考えられる。Zetel (1966) によれば、母-息子関係が言及されている箇所は診療録では40か所以上にのぼるのに対し、公刊された論文では6か所（しかも簡潔な記述）にとどまるという。つまり大幅に省略されているわけだが、この理由として、フロイト自身の母親への憎しみの否認（小此木, 1977）、あるいは患者から影響を受けた強迫性ゆえの隔離（Mahony, 1986）といった逆転移が働いたため、さらには後でも述べるように、エディプス理論から考察しようとする意図があったためと考えられる。

第2に、姉妹に関する内容が省略されていた。この点も先の検討で指摘している（佐藤・鏞,

2004a, 2004b）。省略されていたテーマをあげると、「妹オルガへの父親の下品な行為に関する記憶」(#41)、「姉ロザリーエへの腹立ちと迷い」「姉ロザリーエ、お針子、恋人との関係」「自慰と姉の死」(#42)、「家庭医の娘と妹オルガとの間での義弟ヤコブの心の揺れ」「妹オルガとの恋人のような関係」(#44)、「姉ハートヴィヒの美しい身体」(#46)などである。こうした姉妹との関係はほとんどが性的な文脈で語られており、情緒的な関係がほとんど語られていない。性的なテーマはたびたび登場し、とくにお針子との間で活発であるが（「お針子との性的関係」(#45・#46)「お針子との性交」(#46)）、これらも論文には省略されている³⁾。これらを扱わなかったのは、患者と恋人との関係を強調しなかったためであろうか、あるいは患者のプライバシーを配慮したためであろうか。

第3に、患者のフロイトに関する転移空想が、一部示唆されていたが、かなり省略されていた。この点も先の検討で指摘している（鏞・佐藤, 2005a, 2005b）。公刊された論文では、患者が「転移空想の助けをかりて、自分が忘れていた過去のこと、あるいはただ無意識にとどまっていたことを、新しいこと、現在のこととして体験するようになり、陽性転移（「フロイトの娘との空想」(#41)）や陰性転移（「フロイトの娘を便で汚す空想」(#30)）があげられているが、実際はそれ以上のものであった。省略されていたテーマをあげると、「フロイトの妻と母がニシンでつながっているという転移空想」(#40)、「ニシンの転移空想」「自分の祖母と恋人の祖母がフロイト家の家政を仕切っているという空想」(#42)、「ニシンの転移空想の意味」(#43)、「ニシンの転移空想に関する空想」(#44)である。これらは一連のニシンにまつわる転移空想をなしている。それは、フロイトの妻と母の互いの肛門はニシンでつながっており、一人の少女が

「まるで遊ぶようないとも簡単な手さばき」でニシンを断ち切ると、二つの部分が抜け落ちるというもので、この二人の女性を解放した子どもは、「私の学問」、すなわちフロイトであったという。その後も患者は、その子どもを足蹴りにするなどの空想を抱いている。

この転移空想にはセッション中のフロイトの行為も影響を与えている。前の回のセッションの冒頭でフロイトは空腹の患者へ食事を出しているが、この食事がニシンであり、患者は「ニシンが大嫌い」であったため手をつけなかったという（#41）⁴⁾。そして、食事のせいで時間を無駄にし、治療が長引いた不満を述べ、逆に食事代として余分に料金を払わなくてはならないと感じている。こうしたセッション中のフロイトと患者のやりとりも論文には省略されている（たとえば、「患者への読書のすすめ」（#40）、「フロイトの賛辞に対する嬉しさと拒否」（#44））。おそらくフロイトは、表向きは治療者の中立的態度をすすめていたことから、こうしたやりとりを省略したのであろう⁵⁾。

このような省略点に対して、公刊された論文でも同様に取りあげられているものとして、患者の強迫症状がある。テーマを上げると、「痩せ強迫」「計算強迫」「保護強迫」「理解強迫」「保護強迫における後悔と償い」「理解強迫における疑惑」「石をどけたり置き直す強迫」（#40）、「痩せ強迫」（#47）である。これらは「恋人との関係」（#40）から生じているものであり、公刊された論文においても恋人への愛憎の葛藤と強迫の発症という文脈で考察され、強迫神経症の中核理解となっている。このこともあってか、強迫症状の背景にある葛藤の考察が新たに追加されている（たとえば、「計算強迫における恋人への防衛と憎悪」「恋人への保護感情と敵対感情」（#40））。

以上の対比をまとめてみると、これまでの検

討と同じく、フロイトはねずみ男の症例を公刊する際、かなり意図的に臨床素材を再構成し考察しようとしたことが想像できる。父親や恋人への愛憎の葛藤が強迫症状の発生機序となっており、その欲望と禁止というエディパルな問題として論を展開していった。つまり、「フロイトにとってランツァーは、エディプス・コンプレックスを例証する格好の症例と考えられたのかもしれない」（笠井、2006；北山、2006）。

もちろん、臨床素材を意図的に取捨選択していない症例・事例研究というのはありえない。というのも、ある素材は扱うが別の素材は扱わないといった吟味過程を経ないと症例・事例報告にならないし、それを症例・事例研究と呼ぶためには何らかの知見が提供されなくてはならないからである。ここで言いたいのは、フロイトが行った素材の取捨選択を通して、一体何が見えてくるだろうかという問いである。

「ねずみ男」の症例は、フロイトのほかの症例に比べると、一般に成功例として知られている。治療的だった要因はさまざま検討されているが、その一つに、フロイトがエディプス理論以外の文脈をあえて選択的に扱わなかったことが指摘されている（北山、2006）⁶⁾。フロイトは患者の複雑でやっかいな話を聞き、陰性転移を受け止めながらも、エディプス・コンプレックスに焦点づけた。強迫者にありがちな話題の拡散に巻き込まれずに済んだというわけである。したがって、治療においてすでに素材を取捨選択していた可能性がある。つまり、公刊する際の問題というより、すでに治療場面における問題であったとも考えられるのである。

また、公刊時のフロイトの状況を考えると、別の面が見えてくる。1908年4月27日、ザルツブルクで開かれた第1回国際精神分析学会において、フロイトはねずみ男の症例を発表した⁷⁾。この国際精神分析学会は、フロイト理

論の支持者から会合を開くよう求められて開催に至っている。当時はフロイトの考えや精神分析の支持者が世界中に出始めたところで、フロイトはその中心となって牽引していこうとする意気込みで溢れていた。強迫の発生機序やエディプス理論など、自身の考えを世に知らせるこの上ない機会であっただろう。

しかしながら、その発表後、フロイトが症例をどのように論文にまとめるかは、また別の問題であった可能性がある⁸⁾。治療が終了し、およそ半年後の1909年6月に、フロイトは症例の公刊にむけて準備ををはじめ(143F)、1ヵ月後の7月7日に原稿を仕上げている(150F)。その最中の6月30日、ユングに宛てた書簡(149F)のなかで、こう告白している。

ところで私が夢中になっているひとつのことは「ネズミ男」の研究です。この研究は、大変むずかしく、私の表現能力を超えています。関係者以外にはおそらく何人も踏み込めない研究領域でしょう。われわれは、精神がおのずとつくり上げた巨大な芸術作品を、おずおずと批評するだけです。ね！残念ながら私の研究テーマがあまりに遠大であるために、両手から内容がぼろぼろとこぼれていってしまうようです。探求のすべてが貧弱であり、不完全なためになかなか真相に達しません。まったく情けないことです。(邦訳、p.257)

「私の研究テーマがあまりに遠大であるために、両手から内容がぼろぼろとこぼれていく」という表現はさまざまに解釈できる。セッションの内容をエディプス理論ですくいとろうとしても、その多くが両手からぼろぼろこぼれおちるように感じられたのかもしれない。実際、本人の納得のゆくところまでには仕上がらなかつ

たという(150F)。しかし、その両手に残ったものも決して少なくないのである。

注

- 1) 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修(監訳) 高橋義人(訳)(2006)人文書院、8-153.
- 2) 強迫神経症の一症例に関する考察 小此木啓吾(訳)(1983)フロイト著作集9、人文書院、213-282
- 3) 患者が自分より身分の低い女性たちと多くの性的関係を持ち、結婚と区別しているのは、当時の価値観や社会構造も関係しているという(井口、2006)。
- 4) この行為はフロイトのいう中立的な治療態度に反するように見えることから、治療的でないとする批判的な見解がある(たとえば、Zetel, 1966)。しかし、当時の文化的背景を考えるとむしろ自然であったとする見解(北山, 1993)、さらに相互交流として治療的意義を認める見解(Lipton, 1977)がある。
- 5) このような患者との相互交流が公刊された論文では省略されていることについてLipton(1979)が指摘している。
- 6) 逆にこのことが治療上の限界であり、プレ・エディパルの問題を扱わなかったとする批判的な見解もある(たとえば、Zetel, 1966)。
- 7) Jones(1961)によると、「大陸時間の朝8時に始まり、我々は熱心に耳を傾けた。11時に彼は話をやめ、これで十分であろうといった。しかしわれわれは夢中になっていたので、もっと続けてほしいと言ひ張り、彼はほとんど1時になるまで話し続けた」(邦訳、p.261)。なお、治療が約1年続いたとすると、治療中での発表ということになる。
- 8) 症例「ねずみ男」の論文作成について、Gay(1988)の『フロイト』(邦訳 pp.312-316)を参照した。

文献

- Gay, P. (1988) : *Freud*. New York & London/ W.W.Norton & Company, Inc. 鈴木晶(訳)(1997)フロイトみすず書房
- 井口由子(2006) : 「ねずみ男」の病歴と生活史 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修(編集・監訳)(2006)人文書院、176-187.

- Jones, E. (1961) : *The Life Work of Sigmund Freud*. Basic Books Publishing Co., Inc. 竹友安彦・藤井治彦 (訳) (1969) フロイトの生涯 紀伊国屋書店
- 笠井仁 (2006) : フロイトと「ねずみ男」の治療 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修 (編集・監訳 (2006) 人文書院, 163-175.
- 北山修 (1993) : フロイトと「鼠男について」, 吾妻ゆかり, 妙木浩之編 : フロイトの症例 (現代のエスプリ 317), 115 - 128, 至文堂.
- 北山修 (2006) : 「ねずみ男」の技法論的検討 「ねずみ男」精神分析の記録 北山修 (編集・監訳 (2006) 人文書院, 204-216.
- Lipton, S. D. (1977) : The advantages of Freud's technique as shown in his analysis of the Rat Man. *International Journal of Psychoanalysis*. 58, 255-73.
- Lipton, S. D. (1979) : An addendum to 'The advantages of Freud's technique as shown in his analysis of the Rat Man'. *International Journal of Psychoanalysis*. 60, 215-6.
- Mahony, P. (1986) : *Freud and Rat Man*. New Heaven and London/Yale University Press.
- McGuire, W. & Sauerländer, W. (Ed.) (1974) : *The Freud / Jung letters*. The Hogarth Press and Routledge & Keagan Paul. *Sigmund Freud / C.G.Jung Briefwechsel*. S. Fisher Verlag. 平田武靖 (訳) (1979) フロイト／ユング往復書簡集 (上) 誠信書房
- McGuire, W. & Sauerländer, W. (Ed.) (1974) : *Sigmund Freud / C.G.Jung Briefwechsel*. S. Fisher Verlag. 金森誠也 (訳) (2007) フロイト＝ユング往復書簡 (上) 講談社学術文庫
- 佐藤淳一・鐘幹八郎 (2003) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅰ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公開された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理研究紀要／研究編, 創刊号, 117-130.
- 佐藤淳一・鐘幹八郎 (2004a) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅱ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公開された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 2, 115-124.
- 佐藤淳一・鐘幹八郎 (2004b) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅲ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公開された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 2, 125-133.
- 鐘幹八郎・佐藤淳一 (2005a) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅳ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公開された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 3, 65-73.
- 鐘幹八郎・佐藤淳一 (2005b) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅴ) - 診療記録の翻訳の試みおよび公開された論文との対比. 京都文教大学大学院臨床心理学研究科紀要／研究編, 3, 75-84.
- 鐘幹八郎・佐藤淳一 (2010) : フロイトの症例「ねずみ男」に関する考察 (Ⅵ) - 「診療録」と「公開された論文」との対比 - . 京都文教大学臨床心理学部研究報告, 2, 179-192.
- Zetel, E. (1966) : Additional Notes Upon a Case of Obsessional Neurosis: Freud 1909. *International Journal of Psychoanalysis*. 47, 123-129.